

## 平成 23 (2011) 年度 ヒグマ保護管理方針検討会議 議事概要

### 第 1 回会議

- ・日時：平成 23 年 8 月 4 日 (木) 13:00～16:00
- ・場所：斜里町 ゆめホール知床 会議室 1

### 配布資料

- ・議事次第
- ・出席者名簿

### 議事 1：管理方針の策定にかかるスケジュール

- 資料 1-1. ヒグマ保護管理方針検討会議の経過報告・今後の予定
- 資料 1-2. 「知床半島ヒグマ保護管理方針 (案)」
- 資料 1-3. 「知床半島ヒグマ保護管理方針」の策定スケジュールについて

### 議事 2：「知床半島ヒグマ保護管理方針 (案)」の住民説明会について

- 資料 2-1. ヒグマ保護管理方針 (案) に関する住民説明会について
- 資料 2-2. 住民説明会で配布する資料「ヒグマ保護管理方針 (案)」の概要版
- 資料 2-3. 住民説明会で実施するプレゼンテーション (案)

### 議事 3：ヒグマに関する住民の意識調査アンケートについて

- 資料 3-1. ヒグマに関する住民の意識調査アンケートについて
- 資料 3-2. 斜里町・羅臼町で実施するアンケート調査の概要

### 議事 4：「中長期的な管理のあり方」について

- 資料 4. 「将来シナリオ」と「中長期的な管理のあり方」について

### 議事 5：その他

## 出席者

<b>ヒグマ保護管理方針検討委員 (50音順)</b>		
北海道大学大学院 農学研究院 准教授		愛甲 哲也
東京農工大学 農学研究院 教授		梶 光一
野生鮭研究所 所長		小宮山 英重
北海道大学 観光学高等研究センター 教授		敷田 麻実
北海道大学大学院 農学研究院 准教授		庄子 康
横浜国立大学 環境情報研究院 教授		松田 裕之
北海道立総合研究機構 環境科学研究センター 研究主幹		間野 勉
<b>関係行政機関</b>		
北海道森林管理局	自然遺産保全調整官	梶岡 雅人
同 知床森林センター	所長	金澤 博文
北海道環境生活部環境局自然環境課	主幹	東 雅永
同	主査	小宮山 健太
斜里町総務環境部環境保全課	課長	百々 典男
同	自然保護係長	岡田 秀明
同	自然保護係	東 優里
羅臼町水産商工観光課	課長	石田 順一
同	主事	遠山 和幸
<b>オブザーバー</b>		
北海道大学大学院 獣医学研究科 教授		坪田 敏男
標津町農林水産課	課長	滝本 清
同	自然保護専門員	長田 雅裕
<b>ヒグマ保護管理方針検討会 事務局</b>		
環境省 釧路自然環境事務所	所長	野口 明史
同	次長	中山 隆治
同	自然保護官	加藤 倫之
同 ウトロ自然保護官事務所	上席自然保護官	野川 裕史
同 羅臼自然保護官事務所	自然保護官	三宅 悠介
<b>ヒグマ保護管理方針検討会 運営事務局</b>		
財団法人 知床財団	事務局長	山中 正実
同	事務局次長	田澤 道広
同	事務局次長	増田 泰
同	羅臼地区事業係 係長	新藤 薫
同	保護管理研究係 係長	小平 真佐夫
同	保護管理研究係 主任	葛西 真輔
同	羅臼地区事業係	石名坂 豪
同	保護管理研究係	能勢 峰

## <環境省釧路自然環境事務所挨拶>

野口所長：本日はお忙しい中、平成 23 年度第 1 回知床ヒグマ保護管理方針検討会議（以下、検討会議）にご参集いただき、また日頃より知床の保全管理に御協力いただき、感謝申し上げます。本日はまず、管理方針の策定にかかるスケジュールについて、説明をさせていただきます。また、地域住民がどのような意見を持っているのか、ヒグマに関する住民の意識調査アンケート（以下、アンケート）について、説明させていただきます。最後に、中長期的な管理のあり方について、ディスカッションを行いたいと考えています。ヒグマ保護管理方針の策定については、専門家や関係行政機関の協力がたいへん重要と認識しています。引き続きご協力をお願いしたい。それでは、忌憚のないご意見をいただきたく宜しくをお願いしたい。

### 議事 1 管理方針の策定にかかるスケジュール

- 資料 1-1、1-2、1-3…加藤（環境省）より説明。
  - ✓ これまでの会議の経過と予定について簡略に説明。昨年 3 回の会議を実施し、知床半島ヒグマ保護管理方針（案）（以下、管理方針）を作成した。今年度の会議は今回を含めて 2 回実施予定。

### 議事 2 「知床半島ヒグマ保護管理方針（案）」の住民説明会について

- 資料 2-1…加藤（環境省）より説明。
  - ✓ 住民説明会の方法について説明。概要版の資料を配布し、パワーポイントによるプレゼンテーションを予定。

松田座長：適正利用・エコツーリズム検討会議では詳しい議論がされなかったということだが、今後はどのように議論していくのか。

環境省 加藤：今年度第 1 回の適正利用・エコツーリズム検討会議では、方針案を資料として配布するに留まったので、今後議論の機会を設けることを検討したい。

愛甲委員：住民説明会とアンケートによる意識調査を実施するとのことだが、アンケート

の前に住民説明会を実施すると、アンケート結果に多少なりとも影響を与えると考えるが、どのような予定で実施するのか伺いたい。また、住民説明会用の資料にゾーニングと行動段階区分の表がついていないが、住民が一番知りたいのは自分が住んでいる場所や仕事をしている場所がどのようにゾーニングされていて、ヒグマが出没した場合にどのような対応がされるのか、という点だと考える。ゾーニングと行動段階区分に関する表を提示する必要があると考える。

環境省 加藤：住民説明会の実施時期は9月と考えている。アンケートの実施時期は庄子委員と相談したい。ご指摘の通り行動段階区分の表は重要と考える。住民説明会の資料はまだ案の段階のため、他にも不足な部分があればご指摘願いたい。

松田座長：それでは資料2-2、2-3を説明した後に議論いただきたい。

- 資料2-2、2-3…知床財団 葛西より説明。

松田座長：アンケートと住民説明会の実施時期について、愛甲委員から意見があったが、その点はどうか。

庄子委員：アンケートの内容や実施時期については、現在、環境省と調整している段階である。

松田座長：アンケートの前に住民説明会が開催されることもあり得る、ということか。

庄子委員：理想はアンケートを先に実施することだが、スケジュール調整に鑑み、住民説明会が先になってもやむを得ないと考えている。

間野委員：住民説明会用の資料とスライドに関して申し上げたい。全般的に管理方針を切り貼りしたような形になっているが、肝心なことが抜けている。管理方針には「防除を実施して問題個体の発生を抑制する」と書かれている。ならば、説明会用資料にも防除により軋轢を低減していくことを明記すべきだろう。愛甲委員の指摘にあった通り、対応区分の表は重要であるが、今の状態のまま表をつけてもおそらく読んでもらえない。例えば、一般住宅のあるゾーン4や5ではどのような管理対策が実施されるかがわかるように、身近な所を強調して説明した方がよいと考える。住民が直接関係するゾーン4や5では、住民の安全確保や被害防止が優先であることを強調すべきだ。

知床財団 葛西：ご指摘の通り、ゾーン4や5にフォーカスした内容にすると説得力がある

と考える。説明会の時間も限られるので、盛り込む内容と時間のバランスを考慮しつつ改訂したい。

小宮山委員：ゾーニングを地図に落とし込んだ資料について、ゾーン 1～5 の色分けがわかりにくい。ゾーン 1～3 と 4～5 をまず大きく色分けし、その中で同系統の色の濃淡で分けていけばわかりやすくなる。ヒグマとどのように付き合っていくのかを明確に宣言するものとすべき。

環境省 加藤：そのように改訂する。

北大 坪田：標津町での住民説明会について意見を申し上げる。標津町は世界遺産地域に含まれておらず、標津町の住民説明会では標津町のヒグマが知床半島とどのように関わっているかについて、標津町向けに配慮した説明が必要と考える。

環境省 加藤：ご指摘の通り、なぜ標津町がこの管理計画に入っているかなど、経緯を説明する必要がある。

松田座長：なぜこの 3 町が対象地域となったのか説明も必要。町によって説明の仕方も工夫が必要になるだろう。

適正利用・エコツーリズム検討会議との合意形成は今後どう進めるのかという意見があったが、それに付随する資料は必要なのか。また住民説明会以外に、観光関係者向けの意見集約の場が必要になるだろうか。

環境省 加藤：適正利用・エコツーリズム検討会議では、ヒグマ保護管理方針についてはほとんど議論されていない。また、観光関係者に対し説明会を実施することも当初は想定していなかった。

間野委員：昨年度 3 月の適正利用・エコツーリズム検討会議の時点では、まだ管理方針で具体的な利用のあり方についてまとまっていなかったもので、現状報告という段階に留まったのではなかったか。

敷田委員：現状を申し上げると、適正利用・エコツーリズム検討会議では管理方針について十分な説明ができておらず、議論もされていない。しかし、ヒグマ保護管理方針については、観光関係者も利害関係者であるという点から、説明は必要と考えている。ただ、適正利用・エコツーリズム検討会議において、この会議と同じような議論をしてもあまり意味がないので、この会議で作成している住民説明会用の資料を観光事業者向けに改訂して

説明すれば良いだろう。基本的には、地域住民への説明が第一であると考えており、それがある程度進んだ段階で観光事業者を対象に説明会を開催する形が望ましいのではないか。一般住民の方と異なり、観光事業者はヒグマについて観光資源としての認識もあると思う。従って、一方的な説明会より、意見交換会のような対話形式が適当だろう。実施に際し具体的にどう展開していけばいいのか、これについては知床財団の方が詳しいと思うがいかがか。

知床財団 山中：知床五湖に新しい制度を導入する過程で、かなり深い議論が行われた。しかし、五湖以外の知床半島全体について、議論は行っていないので、十分な意見交換が必要と考える。

敷田委員：適正利用・エコツーリズム検討会議において部会を作って対応することもできるが、いずれ意見交換の場が必要となるのであれば、別に受皿を作ることも必要と考えられるがいかがか。

環境省 中山：いきなり部会を作るのではなく、まず観光事業者向けに説明会を両町各 1 回開催したいと思う。

松田座長：それは観光船事業者も対象とするのか。

環境省 中山：基本的には観光関係者全般を対象と考えている。その場でどのような意見が出るのか参考にしたい。

梶委員：資料 2-3 の調査・モニタリングを説明するスライドについて、住民説明会においてあまり細かな話はできないと思うが、大事な項目については、何のために調査・モニタリングを実施するのか、目的について説明することを検討してほしい。

知床財団 葛西：そのように改訂したい。

間野委員：資料 2-2 について、全般的に書き改めるということではよろしいか。文字が多く、漢字が多いため、ただ読むだけでも時間がかかるし理解しにくい。住民の視点に立って、理解しやすいよう見せ方を工夫してもらいたい。

松田座長：この資料については後日作成し直し、電子メールで内容を確認する形にしたい。

敷田委員：住民を代表する町の方に、この管理方針ができたら具体的に何がどう変わると

認識されているか、お聞きしたい。それが住民に説明を行う際の核になると思う。

斜里町 岡田：現在ヒグマについては知床財団が専門的に対応しているが、今まで明確なヒグマ対応のマニュアル的なものは作っていなかった。例えばこの場所にヒグマが出没した場合にはどのような対応をするか等、明確なラインは引かれていなかった。管理方針ができれば対応の根拠を示せるようになり、住民にとっても理解しやすくなると思う。

羅臼町 石田：羅臼町についても同様のことが言える。

標津町 滝本：標津町も概ね同様である。駆除などの対応をする場合に、指針ができることで住民に説明しやすくなる。ただ、住民のヒグマに対する認識が高まることにより、行政に求められる課題が増加する可能性はある。

小宮山委員：課題とは具体的にはどのようなものか。

標津町 滝本：今までヒグマに対してさしたる認識を持っていなかった住民が、認識することで不安を感じるようになり、不安を解消するため行政に対策を求めてくることが考えられる。仮にシカの死体があったとして、それがヒグマを誘引すると考え、不安を感じ、直ちに死体を撤去するよう行政に求めてくる、といったような、行政に対する要望が増える可能性がある。

松田座長：2点質問したい。住民説明会の際に意識調査アンケートについては言及しないのかという点と、中長期的な管理のあり方については触れないのかという点だが、いかがか。

環境省 加藤：1点目については、住民説明会とアンケートの実施時期を調整して決めたい。2点目については議題4の議論の内容にもよるため、後ほど決めたい。

### 議事3 ヒグマに関する住民の意識調査アンケートについて

- 資料3-1…環境省加藤より説明。
- 資料3-2…庄子委員より説明。

庄子委員：これまでの経緯を説明する。ヒグマに関する意識調査アンケートは、まず北海道大学と標津町で企画し、現在、アンケート用紙の配布を終え、回収を行っている段階である。アンケートの目的は、今後標津町でヒグマの管理をするに先駆け、住民の意識を知

ることである。今回のアンケート結果と比較できるような形で斜里町・羅臼町でもアンケートを実施したいと考えている。今回の標津町のアンケートについては、具体的な中身は10年前に知床財団が実施したものを基に組み立てているものの、住民の意向に関する設問は、いくつかの将来像を提示し選択してもらう形式にしている。斜里町・羅臼町でこの形式のアンケートを行った場合、説明会で提示する管理の将来像と住民が望む将来像とはおそらく一致しないと思われるので、この部分については別の方法を考えたい。

先ほどからの意見にもあるように、住民説明会の実施時期との兼ね合いについては、考慮すべき点であると認識している。住民説明会の後にアンケートを実施すると、回答が説明会に対する意見になってしまう可能性があるため、アンケートの位置付けは前もって明確にしておきたい。先ほど配布した資料3-2のような手法を検討しており、これにより住民がどのような管理方法を重要視しているかが明らかとなる。この調査は、次に管理方針を改訂するに当たって有益なデータを収集するという位置付けが良いと考えるがいかがか。

松田座長：アンケートの目的を明確にしたいとのことだが、管理方針の合意形成のためのものなのか、あるいは中長期的な管理のためのものなのか、環境省の意向を伺いたい。

環境省 加藤：管理方針の改訂に資するデータという位置付けにしたい。

庄子委員：それが良いと思う。説明会に対する回答というというような形のアンケートになってしまうので、できれば住民説明会とアンケートの実施時期は少し離すのが良いと考える。

愛甲委員：アンケートを先に実施し、すぐ後に住民説明会を実施、という流れが良いのではないか。時間があくとアンケートの結果を求められる可能性がある。

敷田委員：平成13年度に実施したアンケートは11月に実施されているが、実施時期によってデータに差が生じる可能性はあるか。また、住民説明会との関連は伏せておいて、10年前のアンケートと比較するという説明で実施すれば、住民にとっても混乱は少ないと思うがどうか。もう1点、10年前にはなかった設問だと思うが、ヒグマを害獣ではなく資源としてどう認識しているかという項目を、可能であれば載せていただきたい。

松田座長：10年前のアンケート結果があれば概要を教えてください。

庄子委員：データをまとめていた学生の久保から説明申し上げる。



北大 久保：10 年前のアンケートは、11 月の広報を利用して斜里町・羅臼町の世帯主の方に回答をいただいた。配布数は斜里で 2,380 世帯、羅臼で 2,100 世帯であった。

松田座長：実施時期を合わせる必要があるかという点についてはいかがか。

庄子委員：むしろ斜里町・羅臼町の方に 10 年前のアンケートを 11 月に実施した理由があれば伺いたい。多忙な時期を避けたということなのか。

斜里町 岡田：特に理由はなかったと思う。

羅臼町 石田：漁業なら 11 月が一番多忙な時期と言える。

松田座長：実施時期が前回と異なると、回答者に偏りが生じる可能性があるが、職種を聞けば補正はできると思われる。

知床財団 山中：前は基本的に世帯主に書いてもらい、個人ではなくその家庭を代表する回答をしてもらった。配布と回収は自治会組織に依頼したので、回収に時間がかかった。同じ方法で実施するのであれば、かなり時間がかかると考えた方がよい。

松田座長：その場合、回収する前に住民説明会が開催されるということも考えられる。

庄子委員：回答の意思がある人は多忙でも回答してくれるものなので、アンケートの実施時期については、ある程度こちらの都合で決めたいと思う。もう一点、回収方法についてだが、前は自治会にお願いして 70%という高い回収率を得た。ただ、地元の方に負担をかけるという点と、10 年前より自治会の組織率が下がっている点が憂慮されるため、今後も調査を継続する上でのメリット・デメリットを考慮して、抽出調査を検討したい。

松田座長：アンケートについては庄子委員に一任ということでよろしいか。内容についてメーリングリスト内で吟味する必要はあるか。

敷田委員：繰り返しになるが、アンケートの目的が管理方針への意見を聞くものではなく、ヒグマに関する住民の意識調査であり、10 年前との比較であるということが明確に説明されていれば、詳細な内容まで議論しなくてもよいと考える。

松田座長：地域住民の望む将来像と管理者が提示する管理方針が一致しないだろうという意見があったが、これについてはいかがか。

梶委員：管理方針に非常に曖昧な箇所があるのが気になっている。具体的には、なぜヒグマ個体群を現行水準で維持するかの理由が、管理方針の目的の部分に書かれていない点だ。しかし、背景の部分には、知床のヒグマの目撃件数は全道的にみても突出して多く、人との軋轢が生じていると書かれている。そんな知床で、なぜで現行水準を維持する方針をとるのかということの説明する必要がある。現状では生息数や増減等の実態把握が不十分であって、最初の5年間は現行水準維持の方針とするが、中長期的な計画では、今後の調査でヒグマの生息数や生息地の問題を明らかにし、次期の改訂時に見直していくという書き方が良いと考える。知床半島のエゾシカの管理計画では、第1期にゾーニングをしているが、実態把握が不十分であることも明記している。

小宮山委員：庄子委員に質問したい。住民と管理方針案の乖離とは具体的にどのようなものか。それが明らかでないと議論にならないと思う。

庄子委員：管理方針は一つしかないが、住民は様々な意見を持っており、利己的なものも少なからず寄せられるだろう。全員を納得させることはおそらくできない。あとは農業と漁業とで要望にどのような違いがあるのかなど、それぞれの状況を把握して対応するしかないと思う。方針はあくまで方針であり、細かな所まで方針に加える必要はないと考える。

小宮山委員：多様な意見があってもまとめきれないという解釈でよいか。

庄子委員：そうだ。いくら良い案を出しても全員の賛同は得られない。

敷田委員：多様な意見があり納得できない人がいることが明らかとなる点が、現時点でアンケートを実施する意味であると考え。この管理方針は多くの関係者が見聞きした事柄や調査した知識を基に作成されており、まったく現状に即さないということはない。ただ理解が得られないと意味がない。例えば、特定のグループの人達にとっては理解しにくいなどの傾向がわかれば、講じるべき普及の方法も見えてくる。このアンケートは、住民の意識を調査して、管理方針をどう普及していくか、その手法を検討する上で、現時点で最も優れた方法であると考え。

松田座長：管理方針について聞くアンケートではないことを確認する。どのような意見があるのかを把握することが目的である。その上で、アンケートの内容や文言などについては庄子委員に一任することよろしいか。

敷田委員：よい。アンケート実施にあたり、町との調整は綿密にお願いしたい。

庄子委員：特にアンケートの内容については、町に助言・協力をお願いしたい。

斜里町・羅臼町・標津町：承知した。協力する。

松田座長：実施の時期が未定であるが、これについては庄子委員と環境省、三町との調整の上で決めるということによろしいか。

一同：よい。

#### 議事 4 「中長期的な管理のあり方」について

- 資料 4…加藤（環境省）より説明

松田座長：管理方針の中長期的なあり方、将来シナリオの位置付けについて、改めて議論し直すことが必要になると思うが、質問や意見はあるか。

小宮山委員：いままでの議論で、とりあえずゾーニングができた。次は、ゾーニングに基づき、人とヒグマがどう付き合うかについて具体的なモデルを作るといのはどうだろうか。それを行える場所が何カ所かある。私自身、ダムの上流にサケマスを遡上させて、ヒグマが人家近くに出て来ないようにする方策について 6 年間ほど実験を行い、結果を自分なりに整理しつつある。整理した結果から、ヒグマが人家近くに出てこないようにする具体的な方法が概ね見えてきており、モニタリングは並行して続けながらも、一方で、ヒグマとどう付き合うかモデルを作るといやり方があると思うがどうか。

松田座長：いまの発言は、管理方針とどのような関連があるのか教えてほしい。

小宮山委員：農家や漁業者など、住民にとっての管理方針が、「ヒグマについての問題を決して解決してくれない、現実と乖離した存在」になることを懸念している。ヒグマに対して持っている一人一人の情報はゆがんだ状態にある。ゆがみを修正しながら、管理方針を理想に近づける努力をこの検討会議の場ですべきと思う。

間野委員：昨年度の第 3 回ヒグマ保護管理方針検討会議の資料 3、「5. 合意形成の進め方」には、「中長期的な管理のあり方については別途検討する。平成 23 年度の夏頃をメドに現在の保護管理上の課題を踏まえた将来の管理のあり方に関する複数のシナリオを作成

する」とある。さきほどの説明では、地域住民に示すことのできる将来の方向性は、管理パワーをどう分配するかに限られるという話だったが、どのような分野にどれだけ管理パワーを分配するかにより、出てくる結果は異なってくる。民意だけでなく、生態系の反応、ヒグマの行動、ヒグマの個体数変動によっても、結果は異なってくる。出てくる結果が管理方針の目標に沿うものになるかということも含めて考えなくてはならず、だからこそ将来シナリオの検討が必要になったと理解している。さきほどの説明だと私の理解と異なる印象を受けたが、いかがか。

環境省 加藤：将来シナリオについて、管理パワーをどの分野にどの程度分配するかでヒグマの反応が変わるというのにはあり得ると思う。ただし、ヒグマの反応がどう変わるかを議論する場合、ヒグマに関するデータが必要になる。今の、ヒグマがどうなっているのか、増えているのか減っているのか判然としていない状況下では、現状の管理を続けるしかないと考えている。管理パワーの分配によって、ヒグマ個体群への影響がどう変化するかについては言いきることができない以上、どの分野にどう分配するかを示すことしかできない。保護管理方針を運用する過程で出てくる結果については、その後の修正に生かすということだと思っている。

間野委員：管理方針はあくまでも現在の対策を整理し、当面 5 年間の方向性を示すということで進めてきた。昨年度（初年度）の検討会議は、よりよいやり方があるだろうということを進めてきている。今がどうで今後どうなるかというデータがない、だからこれまでと同じことを行う、というのでは、これまでの踏襲にすぎず、検討会議として何も言えないということになってしまう。これまで行ってきたクマへの対応でできたこと、できなかったこと、様々なことを踏まえた上で、経験的かつ政策的に将来シナリオを作成し、中長期的にどのように考えていけば現時点のマンネリから脱却でき、より良い方向へ持って行けるか、という議論が必要だという前提で進めてきたはずだ。管理方針と同時に将来シナリオを作成し、それを社会に示した上で、利害関係者がどういう姿を望んでいるかを、庄司委員の意向調査の結果とも重ねた上で、次の計画の見直しに反映させるべきだという議論だったと理解している。なぜそうした理解が今になってなくなってしまったのか。もう一度原点に立ち返り、将来シナリオを詰める必要がある。

環境省 中山：確認事項がある。今後 20 年程度の中長期的な目標を作るための将来シナリオの作成は、次期の管理方針のために必要なのか、それとも今回の管理方針を説明するために必要なものなのか。

松田座長：次期のためである。

環境省 中山：これは次期の管理方針を決めるためにやるということか。

間野委員：いまからやらないと間に合わないだろう。

環境省 中山：議論はよいが、不安な点がある。ヒグマ個体数の増減はきちんと説明できるかという説明できない。アンケートに関連するが、住民の意向について、合意形成前の意向を把握することも必要となる。それらとあわせて、諸施策の効果を評価していかなくてはいけない。管理方針は、これまでやってきたことを後追的にまとめたものだと言っているが、新たにゾーニングが加わり、メス成獣ヒグマの捕獲頭数を管理する視点も加えて進めていこうとしている。これらに加えて民間企業からの支援もあり、様々な事業や施策を展開して行こうという段階である。そうであるなら、こうした事業や施策の評価も踏まえて見直しを行う必要があると思うがいかがか。

松田座長：さきほどの小宮山委員、梶委員の話にもあったが、現在の管理方針には、なぜこうなったのかという根本的な説明がないまま、目的や目標が定められている箇所がある。完全なものではない。その一方、ヒグマ対策は日夜行われており、管理方針を明確にする必要がある。現時点の管理方針は、現在行われている方針を明文化するという考えに基づいて作られたが、それに加えて、我々はより長期的なものを考えていると言うほうが、合意を得やすいのではないか。環境省の考えは、せっかく管理方針を作ったのだから、フィードバックがかかるまで議論しないほうがいいということだ。通常はその通りかもしれないが、この管理方針が現在の知恵を全て集めて最適なものを作ったというよりは、現状をまとめたものであるという認識に立てば、異なる見解にたどりつかないか。

環境省 中山：その際、最初に行うのが将来シナリオをつくることなのか。今回の会議では、将来シナリオを議論する予定だった。しかし、内部で議論を重ねた末に立ち往生してしまった。松田座長の言われるように、この方針に書き込めなかったものをそのままにしながら将来シナリオを検討するのが、果たして正しいのかという点に疑問がある。

敷田委員：管理方針を実施する際に将来シナリオが何の役に立つか考えると良いかと思う。

環境省 中山：それがわからない。

敷田委員：それを理解していないのであれば、その点を議論すればいいのではないか。

梶委員：地域住民が一番引かかるのが、なぜ現行水準でヒグマ個体群を維持しないとい

けないのかという点だろう。これは、暗黙の了解として「世界遺産地域だからヒグマ個体群の削減は考えられない」ということだと思う。資料 1・2 の付属資料 4 の表 1 にメス出生率と個体群成長率が書いてあるが、個体群成長率が 1 であれば増減なしということである。かつてイエローストンでは、ゴミ捨て場に餌付いたクマを一掃した。その結果、（全体としての）クマが減少、リカバリープランを作って、核心地域では手厚くクマを保護し、分散するクマに対しても法的な措置を取った。これによって判明したのは、核心地域でだけ守っていても周辺で捕獲するとヒグマ個体群は減少してしまうこと、ヒグマ個体群が大きな船、メタポピュレーションのような構造だということだ。知床のヒグマが同じような構造かどうかはわかっていないが、感覚的には、20 数年前から捕獲を抑制してきたため、ヒグマが減る要因は限られており、ヒグマの個体数は相当回復していると思う。同様に考えている人はたくさんいるだろう。

全道の計画ができていないため、今は管理方針であって管理計画ではない。基本的に変わらないところは、ゾーニングとヒグマの行動に応じた対応をするという部分である。5 才以上のメスヒグマの人為的死亡数の上限は 5 年間で 30 頭となっているが、これは大きな論点になると思う。今の対応を取り続けて、現場で対応を担う知床財団スタッフがどこまで耐えられるか。餌付けの要因をなくすとともに、問題グマを一掃してしまう方法もあるだろう。いずれにしろ、検証してから行うのでは間に合わない可能性は高く、今から準備を始めておく必要があると考える。現在、我々が得られている情報はこういうもので、バラバラに行われていた 3 つの町の対応を広域的な一定方針で実施する、しかしながら情報が足りないので、今後こういう形で見直しをかけ改善していく、という方向性を示す必要がある。

北大 坪田：私も同じ意見である。今回の管理方針で言われていることで、科学的な根拠が書かれていないことがけっこうある。知床半島における生物学的な情報、社会学的な情報を蓄積していく必要がある。それに基づいてヒグマの管理を進めて行くという方針こそが重要である。

もう 1 点、世界遺産地域が地元の住民にとってメリットのあるものとして位置付けられる必要があると思う。ヒグマとの軋轢を解消し、管理の実施体制を充実させ、自然が豊かなことが見目にわかるようにすることも重要だ。アラスカのカトマイ国立公園やデナリ国立公園では、ヒグマを目玉にしたエコツアーが行われている、知床をそうした形に近づけていけば、地元住民にとって国立公園や世界遺産が誇りに思えるものになる。そうした方向に持って行ってもらいたい。

小宮山委員：知床で 6 年間かけて 80 数頭のヒグマを観察してきた。その結果、ヒグマは想像していた以上に知能が高いと考えるようになった。ヒグマは人が何をしているか理解し、人と距離を置いて日常生活を送っている。ヒグマがサケマスを食べに通っていると

ころであっても、人が頻繁に入りこむようになると、ヒグマはそこに来なくなる。人間を恐ろしいものとして意識し、ヒグマの方が引いてくれている事例がたくさんある。

数年前、標津町当幌川で夜中にヒグマによる人身事故があり、(この事故を受け3頭が駆除されたことを踏まえ、)結果として無実のヒグマが2頭殺されたが、人と上手に暮らしていた善良な個体を殺せば、ろくでもない個体が入りこむという可能性があるということをもっと真剣に考えるべきだ。野生においてヒグマは20年近く生きる。人間とうまく暮らしているヒグマが縄張りを持ってくれている間は、人とのトラブルは起きないということを考慮した管理方針を作れるはずである。知床には、サケマスを食べるヒグマを調査することでそうしたデータを取るチャンスがあり、データを取っていくことでヒグマとどう付き合うかアイデアが出せる。データがなければアイデアも出ない。そうしたデータを取れるチャンスがあるのに、やらないのはいかなものか。

斜里からウトロまでの国道を移動のために使っているが、カラフトマスが遡上する季節になると、釣り人に関わるクマ対策のために国道の駐車帯が一部封鎖される。駐車できるところとできないところがあるのは、極めてアンバランスな対応と思えるのだが、いずれにしろ、現状はヒグマが人を観察して、サケマスというおいしい食べ物があるにもかかわらず、人が来るところでは遠慮してくれているためにトラブルが起きていないという状況である。しかし、人間が行き過ぎたことをすれば当幌川のような問題が起きる可能性がある。そのことを知ってもらえば、ヒグマとどう付き合うかは多くの人に簡単に理解してもらえらると思う。そういうデータ開示がないと、このたび作成したゾーニングの結果が納得できないだろう。いろいろな人が生命財産を守るためにヒグマとどう付き合うか、そのコツを明らかにしていけないと合意は難しいと思う。知床には合意を得るためのデータを取るチャンスがたくさんあるので、そのチャンスを生かす知恵を出さないかというのが私の提案である。

環境省 中山：次期の更新をどのように行うのかということについてだが、今回の管理方針はまだ不備が多い。そのため、次期の更新を行うに当たっては、収集したデータを踏まえて議論する必要がある。そこで私が懸念するのは、データ収集を誰が行うのかという点だ。環境省か、委員の皆さんか。私の前の赴任地である小笠原であれば、そうした議論を経てどうするかを決めてきた。その次の段階として、合意形成などがあると思う。やることをやり、手順を踏むのならわかるが、一足飛びに20年先の目標を考えなければいけないという点が理解できない。今回の管理方針を説明するために必要な将来シナリオと、次期の計画、次々期の計画を立てるための将来シナリオは異なるのではないか。その点を明らかにしたい。

松田座長：どのような将来シナリオがあるのか、全く考えないまま議論しても具体性がない。何も考えていないかと問われればそうではない。どんな将来シナリオがあるのか見

ながら議論しないとわからないと思う。

もう 1 点、将来シナリオの作成は、次期の更新のためか、今の合意のためかという話があった。繰り返すが、現在の管理方針は完全ではない。現在の管理方針について合意形成を図る際は、さらに次の見直しの準備を進めているということを同時に言うことが必要だろう。従って、将来シナリオは次の管理方針に反映させるためのもので現在の管理方針のためではない、現在の管理方針のためではないが、将来シナリオの検討を進めていると伝えることが、現在の管理方針の合意のために必要だというのが私の説明である。

環境省 中山：それは理解した。

間野委員：補足する。私は環境省が作成した前回会議の資料には、そのように書かれている。適正利用・エコツーリズム検討会議に管理方針をなぜ投げかける必要があるのかと言えば、管理方針と自然遺産地域内における利用のあり方や人の行動の管理は、密接に関連してくるからだ。管理方針と実際の利用や観光の推進との間に齟齬が生じないように、連携して検討しなくてはいけない。検討会議で、利用のあり方や人間側にどのような行動規制が求められているのかを示す際、具体的に「このようなことが求められるからこういう規制が必要、その結果このようになる」という説明なしには理解されないだろうという理由で、将来シナリオが必要だと考えていた。今回の管理方針をどうするか、見直しの際にどうするかということを問わず、必要なプロセスであると認識している。

松田座長：モニタリングやデータ収集は誰が実施するのかということだったが、資料 1-2 の付属資料 3 にモニタリング項目の一覧がある。このなかに実施が未定のものがあるので確認したい。住民意識調査については、庄司委員が今年度実施する。4 の広域ヘアトラップ調査による生息数推定について、実施の目処はあるのか。

北大 坪田：我々は、ヘアトラップ調査を標津町で実施するとともに、遺産地域内ではルシャ地域で実施している。

知床財団 山中：標津町とルシャ地域で実施するヘアトラップ調査は、広域ヘアトラップ調査とは性格が異なる。広域ヘアトラップ調査は個体数を推定するために行うもので、現在は目処が立っていない。

松田座長：基礎情報が欠けたまま、ということだ。

環境省 中山：それを取り上げる必要があるのか。



松田座長：生息数推定については目処がついていないということだ。

環境省 中山：目処がつかないものをどうするかと言った時、棚上げにして、今の段階のものでまとめるという選択肢があると思うが、現段階で説明が必要なのであれば、いま言ったようなデータの欠如を前提にどのように議論していくか。

松田座長：これまでどのような議論をしてきたか紹介したい。昨年度の第 3 回ヒグマ保護管理方針検討会議での協議結果によれば、複数の将来シナリオが本日の会議で出てくるはずだった。

まず、最初の将来シナリオは、暫定方針、すなわち現在の管理方針のまま継続するというのがシナリオ 0 である。シナリオ 1 が管理を強化する案である。具体的にどのように強化するかとともに、それによってどんな効果が得られるか、逆に問題が起こるとしたらどのようなものかを列挙した。様々な問題の発生、観光業や一般住民への影響、管理体制への負荷まで想定している。シナリオ 2 は馴化個体捕獲強化、すなわち馴化したヒグマを徹底して捕獲する案、シナリオ 3 は利用者の管理を強化する、つまり人間側のコントロールを厳しくする案である。それぞれ、この案を採用することにより本当に軋轢が減少するのか等、様々な議論を公開・非公開の場で行ってきた。前回、WG のあとに議論した内容も含めて紹介したい。

現状の管理に対する課題がある。遺産地域および隣接地域の広範な地域において、人とヒグマの近距離での接触が日常的に発生しており、追い払い等の実施のみでは人慣れヒグマを減少させることは困難と考えられる。人とヒグマの接触を減少させる措置、あるいは接触を管理する方策が必要である。これは現在の管理方針ではまだ積み残している部分があるという認識だ。例えば、羅臼では 10 年前と比較して人を見ても逃げない個体が増加している。これはやむを得ないことだが、その理由としてゾーン 1 と 5 が隣接していること、緩衝地帯がないことなどが列挙してある。

さて、シナリオ 1 であるが、現状の管理を継続し強化するというものである。強化とは何かと言うと、ヒグマへの対応としては、あくまで想定オプションとして、遺産地域内外の境界において捕獲を強化するなど、具体的なものが議論されている。利用者への対応としては、同じく想定されるオプションとして、クマの出没が頻繁な番屋や水産加工場に電気柵を設置し防衛力を強化する。このような議論をしておけば、予算さえつけばすぐにできることもあるだろう。課題としては、駆除措置を早期に行うと捕獲数が目標上限を上回り、現時点のヒグマの実態に関する不完全なデータの下では、個体数の現状維持ができなくなる可能性があること、さらに忌避学習づけを強化することは、コスト面から知床半島全域で実施することはできないことなどが列挙されている。

シナリオ 2 はというと、一定の馴化が見られる個体の捕獲を増強して軋轢を低減し、

地域の生活や産業を守るものである。利用者の安全と良質な自然体験の場を確保するために問題を起こすクマを捕獲する。追い払いを最小限に留めるということなので、捕獲数は増えていくなど、かなり具体的な検討がある程度されている。

シナリオ 3 は、逆に公園利用のコントロールを行い、防御対策を強化することで軋轢を低減する。この場合、ヒグマへの対応としてはむしろ現行の管理方針と同様である。ただし、段階 1 の追い払いを実施しないとか、人為的介入を少なくすることも可能だろう。むしろ、本当にコントロールできるか、すべきかという議論を行っている。このような将来シナリオを示して、広く合意形成を図ることを昨年度の第 3 回の検討会議の際に考えていた。果たしてこのようなことが必要かどうかということで、この議論が行われている。

環境省 中山：将来シナリオを作成、提示し、議論をしていただくことで住民の合意が得られるのか疑問。3つの案の中から選択してくれということではなく、本当に合意形成ができるのか、非常に不安だ。今、あるいはこれまでも、個別に民間企業が協力してくれるなどして（注：ダイキン工業寄付事業によるヒグマ侵入防止フェンス作りなど）、様々な取り組みがなされている。そのような取り組みをきちんと実施し、結果を見ながら住民の方々に理解いただく方が現実的ではないか。

松田座長：今の意見はよく理解できる。こうした複数案の将来シナリオを提示して合意形成するには時間がかかると私は思うが、本当に合意できるかどうか、逆に対立が決定的になるということもあり得ないわけではない。委員の方々の意見はいかがか。

小宮山委員：座長の言われた意見の対立とは具体的にどのようなことか。観光サイドの「ヒグマを見せたい」という意見と、ヒグマ管理サイドの「人慣れさせたくない」という意見のあいだで対立が起きる可能性があると思えるが、他に何かあるか。

間野委員：ヒグマの管理にコストをかけるかどうか、ヒグマ管理ではなく産業振興にコストをかけたかどうかという意見が地域住民から出るかもしれない。同時に実現できることと、どちらかを求めるとどちらかを失うというトレードオフの関係があるということ。これを正しく理解していただく必要があるだろう。庄司委員からも、利己的な意見がそれなりに出るだろうという話があったとおり、なかなか理解を得るのは難しいとは思いますが。トレードオフの関係について、正しい情報や判断材料が提供できるか否かは、その後の議論を熟成させるのに重要なカギになると思う。いきなり合意形成に至ることはない。ただし、積み残した部分やふっきれない部分があるという状況、トレードオフの関係がある状況でどのような選択肢を取るか、管理当局も含め関係者も悩んでいることを伝えた上でコミュニケーションをとることは、その後の信頼関係を作る上で重要だと思う。

その際、将来シナリオは、知床で行われてきた過去 20 年以上にわたる管理活動から得られている経験的・定性的な知見に基づいたものであっても作成可能である。将来シナリオを活用して議論することはできると考える。

松田座長：さきほど標津町の滝本氏から、情報を出すことにより新たな課題が生まれる可能性が示唆されたが、斜里町・羅臼町・標津町から「対立」について何か意見はあるか。

標津町 滝本：基本的な管理方針はきっちり踏まえつつも、いかに柔軟に対応していくか。対応方針の軸は堅持した上で、それに向けてしかるべき手続きをしていくのが行政の役割と考えている。住民の意見をどう判断するかは行政の役割であるが、多様な意見を出してもらい、やりとりを重ねることで住民の理解を得られると私は思っている。

羅臼町 石田：将来シナリオの作成について、5 年管理方針の実施段階前に次の方針にむけて検討を始めることに疑問を持っていた。しかし、松田座長の「現在の管理方針が完璧ではないので、合意形成のためには次期に向けて見直しを検討していると伝えることが必要」という説明で理解した。

一方で、ヒグマの科学的管理とはどういうことか混乱している。具体的には、小宮山委員の発言に疑問を呈したい。魚道ができることで、サケマスが上流に遡上する。するとヒグマが上流に移動し、下流にヒグマがこないだろうというのは理解できる。しかし、サケマスの遡上期以外はどうしたらいいのか。羅臼町では、日常的にクマ対応に取り組んでいるが、クマ対応は個体によって、また、その場その場の状況に合わせた対応が求められる。例えば5月のヒグマの出没には、どう対応したらよいか。

斜里町 岡田：管理方針があることで個別の状況にどのように対応するか一定の方向性はわかるようになるが、管理方針だけでは具体的にそれを適用して進めた場合にどうなるかわからない。管理方針の通りに進んでいくと最終的にどうなるかが理解しづらい。将来シナリオのようなものがあると理解しやすいだろうと思う。ヒグマの個体群を維持しながら、且つ人の利用も最大限自由にする、というのは不可能だ。どちらかを強化するとどちらかを抑えないといけないという関係にある。こういう管理を進めると、この点はどううまくいくが、この点は我慢が必要というのをわかりやすく伝えること、覚悟してもらふ必要があると伝えることが重要かと思う。

敷田委員：斜里町からの意見に賛成である。関わっている人は別にして、この管理方針がうまく動くかどうか、住民が第一に知りたいことはそこだと思う。そのように考えると、将来シナリオは複数作ることに意味がある。また、管理方針を実行したら将来どうなるかを示すとともに、やらなかったらこうなるという点をも示すのが妥当だろう。

管理方針を実行したらどうなるかは、現時点でわかる範囲のもので良い。3町にとっては、住民への説明力もアップするし、説明の際の自信にもなるはずだ。また、こうやったらおそらくこうなると説明するほうが、住民に対して説得力がある。ただ、管理方針がパーフェクトでないということから、想定通りにならない可能性も出てくる、従って毎年のモニタリングが必要になる、という説明になるだろう。

モニタリングは、ヒグマの生態だけでなく、人がどういう利用をしているか、管理がどうだったか、という3つのデータを揃え、このような場で検討して方針を修正するなり、微調整をしていくという仕組みがあればカバーができるのではないか。今一つの問題は、管理を実行する集団と管理の結果を受け取る集団、それに地域住民の理解にはずれが生じるであろうという点だ。これはある意味当然のことだが、ずれを補正するために、地域住民がどのように感じたか、どのように考えたのかという意識調査をモニタリング項目を入れ、計4つのモニタリングを組み合わせてやっていけばよい。

松田座長：将来シナリオ素案の1ページ目が、現状の管理方針を動かすとどうなるかである。ここでは危惧される点だけを列挙しているのだから、これだけで説明すると管理方針が巧く機能しない印象を与えるため、注意が必要である。危惧されることがきちんと議論された上で、現在の管理方針が作られている、という点が重要である。それを踏まえて、他に議論があるか。

敷田委員：管理方針により、何らかの現状の改善はあると考えていいのか。

知床財団 山中：管理方針でまとめたものは、基本的には現状の取り組みについて各町で行われてきたものを記載したもの。これらを整理・明文化することも大きな意味があるが、それだけでなくすぐに対応できる課題については、半歩程度だが現状からの改善をめざした記載をしている点もある。

松田座長：半歩の改善というのは、現在よりもよくなる部分があるということだ。一方、指摘されている問題がますます悪化することもある。次回の検討会議の議題だと思うが、これらについて、どの範囲で合意形成を図っていくかを含めて、将来シナリオをどう出していくか、出さないことも含めて考えていく必要があると思う。たとえば、合意形成は住民だけでいいのか、適正利用・エコツーリズム会議の中で合意形成を図ればいいのか、そうでなければどうするか。これらをセットで議論しないと、文章のまとめ方にも問題が出てくる。

敷田委員：本日この会議に出るまでは、合意形成は観光サイドは適正利用・エコツーリズム会議で、地域住民は各町が行うと、分けて考えられると思っていたが、今の議論を聞

く限り、この検討会議を継続して処理しないといけないテーマだと考えられる。

将来シナリオを用い、並行してモニタリングを実施しつつ、管理方針の見直しや修正をしていくということであれば、管理方針の「11.合意形成と見直しの手法」に手順が書きこまれる必要がある。この点を修正した上で、方針が成立していく仕組みにするべきだろう。

松田座長：2点目の将来シナリオを管理方針に書くか書かないかは、昨年度の3回目の検討会議で書かないと整理されたのではなかったか。

敷田委員：将来シナリオ自体が大きな意味を持つのであれば書く必要がある。あくまでも将来シナリオは参考程度ということであれば書く必要はない。そのことで将来シナリオの位置付けは自動的に決まる。議論を聞く限り、将来シナリオはかなり管理計画に影響を与えると理解したので、中身に記載が必要だと考えた。将来シナリオを住民に説明する道具として、もしくは住民に将来を選択してもらった道具として使うのであれば、将来シナリオによって管理方針に影響が出ることになるので、「このような手順で進める」ということを管理方針に書いておくべきだ。その場合は、複数ではなくひとつの将来シナリオを使用することになると思う。

環境省 中山：コミュニケーション・ツールとして将来シナリオを作成し、議論していくのが第一段階だと感じているがどうか。次期の管理方針を作成する際に必要な将来シナリオ、および、現時点で説明用に示さないといけない将来シナリオがあり、現段階ではそれほど難しく考えず、気楽に、こういうふうを考えているということがわかる将来シナリオであればよいと思う。数年後を見越して作成するが、今は素案であって、将来作るのは議論を深めながらやっていく。

敷田委員：説明の参考資料として気楽にと言われたが、地域住民にすれば、シナリオを突然見せられて管理方針を理解しろと言われても無理だと思うので、練習のつもりで使う。うまくいけば次期の管理方針を改定するときのような手法を使うということではないか。気楽に作るというのはざっくりとした言い方だが、賛成である。

愛甲委員：今ようやく将来シナリオの役割を完全に理解できたところであるが、厳密に将来シナリオを作って、それを選んでもらうのであれば、実行したことで結果の因果関係がはっきりしていないと、個々の将来シナリオからひとつを選んでもらうのはかなり難しい。むしろ議論の材料として使ってもらうのがいいと考える。管理方針に将来シナリオという言葉を使うかは別として、管理方針の合意形成と見直しの部分に、モニタリングの結果や管理方針を作成して行ったことの結果をもとに見直しながら管理方針を修正

していくという内容を具体的に書き込んだほうが良いと考える。管理方針をどのように見直し、運営していくのかというフレームがはっきりしないという話になっている気がする。

環境省 中山：シナリオが一人歩きすることを懸念する。今後の議論に向けていくことが大事だ。簡単なシナリオから始めさせていただき、スキルアップさせていただきたい。

敷田委員：現状では、作成された管理方針を適正利用・エコツアーリズム検討会議の部会で引き取って議論するのは無理だと思う。フレームワークとして本検討会議を維持し、モニタリングしながら管理方針の合意形成・見直し等を進めていくという案を提案したいがいかがか。

松田座長：その点をこの検討会議で確定することはできない。我々は合意形成の論点を整理することはできるが、この場を合意形成の場には使えない。将来シナリオを綿密に作ってどれかを選べると利害関係者に諮るよりも、現状の課題をどうやったら克服できるか、いくつかの方向性、こんなやり方あんなやり方もあるということを示す以上のものではないだろう、と思うがどうか。

敷田委員：どのように進めるかと、どのような体制で進めるかは、対になっていると思う。

梶委員：この検討会議のミッションは、期間限定で管理方針をつくることである。管理方針ができたならば、いったん閉じるべきだろう。次に将来シナリオが出てくるが、どのような形で継続するかは慎重に考えたほうがよい。この体制で検討作業を維持・継続するのはかなり厳しいのではないか。

松田座長：それは、次の見直しの時までにはどのようなスケジュールでどのように反映させていくかを考えないと答えが出ない。次回の検討会議で結論を出さざるを得ない。いまは内部資料だが、論点を整理した身軽な、考え方の違いがわかる程度のものにまとめた将来シナリオを次回の資料の中に入れることになると思う。その後、将来シナリオをどのように使用して実際の合意形成に反映させるかは、改めて議論することになる。

この検討会議で議論を継続し、合意形成まで持って行くことはできないと思うが、これは次回の議題である。そういう理解でよいか。

一同：よい。

松田座長：議題4についても一応の結論が得られた。

環境省 中山：現在の予定では、年度末近くに検討会議を開催することになっているが、すこし早目に開催する必要があるのではないかと思います。また相談させていただきたい。

松田座長：その他として、今年度のヒグマの出没状況等について情報提供願いたい。

知床財団 増田：年度の途中であるため、情報の取りまとめが十分にできていない。今回は大きな点だけ報告し、詳細は年度末の取りまとめ後に報告したい。

まず、斜里側から報告したい。昨秋に引き続き、今春も半島基部の斜里市街地周辺にヒグマが出没する事例があった。このヒグマは、昨年の個体と異なり、頻繁かつ安易に人前に姿を現す個体ではなかった。最近は新たな目撃情報がなくなり、事態は一旦収束している。斜里市街地へのヒグマの侵入は、防風林が回廊になっている。そのため、ヒグマの移動経路を遮断するため、斜里町で防風林に電気柵を設置した。

ウトロは、市街地周辺に電気柵を設置することでヒグマの侵入防止に効果をあげているが、今年、ウトロ港にヒグマが侵入した事例があった。このヒグマも人慣れしている個体ではなかった。駆除を前提に対応を行ったが、結果的に柵を乗り越えウトロ市街地から外に出て行った。

知床財団 田澤：羅臼側は、6月までヒグマへの対応件数が少なかったが、7月に入って目撃・対応ともに増加した。今年は海岸に漂着するトドの死体が多く、通算で8頭程度を役場で処理している。トド死体などを求めて海岸に出てくるヒグマ、親子のヒグマが全体的に目立った。それから、羅臼町役場のある市街地の中心部でヒグマが河川敷を歩き、民家のガラスなどに被害を出した。子を3頭連れた親子ヒグマだったが、結果としてこのクマは駆除となった。これまで被害が出たことのない水産加工場において、残渣に餌付く事例が出た。現在、檻を設置し捕獲を試みている。南知床ヒグマ情報センターが標津町で標識付けしたヒグマが羅臼町に来ているなど、羅臼町南部の標津側では、250～300kg程度の大型のヒグマが目立っている。

標津町 長田：標津町でも羅臼町と同様、5月と6月のヒグマ対応は少なかった。今年は、トド・アザラシの漂着死体が多く、通算10頭以上を回収している。7月には、海岸に漂着したトドにヒグマが餌付いて定着するという標津町では初めての事例が発生し、このヒグマは駆除となった。現場は市街地に近い伊茶仁である。ヒグマは海岸沿いの民家の庭を歩いて海岸線まで移動し、倉庫脇で漂着したトドを食べているという状況であった。

環境省 中山：長時間の議論に感謝する。こちらの不手際をお詫び申し上げるとともに、頂戴した様々な意見を踏まえ、整理しながら対応していきたい。